

Chomsky[1995], *The Minimalist Program* (The MIT Press): Review II

— What Was the Phenomenon Chomsky
after All? —

田 原 薫

【註】の続き — 図9が失敗し、図1が成功するような論理の可能性について —

次の節に移る前に、前回=書評Iの末尾に載せた【註】の、他動詞の項の移動を制約するチョムスキーの論法についてさらに検討を進めてみよう。回顧すれば、前回の2. 節で、彼が背理法によって排除しようと試みた論拠の図1の欠陥は《 t_{Subj} が $Spec_{Agr_{RS}}$ や Obj (および $Subj=Spec_{Agr_{RO}}$) と同じ最小領域に属さなくなった — 所謂 'equidistant' でなくなったから、 Obj はそんな〈異分子〉 t_{Subj} を飛び越えて上部、つまり $Spec_{Agr_{RS}}$ へ移動できない》ということであった。それに対して評者は、「他動詞Vが2段階移動する枠組に固執する限り、たとえ彼が成功/正解と見なす図9の成立過程を辿っても、 $Spec_V$ がやはり $Spec_{Agr_{RS}}$ や t_{Obj} と equidistant でなくなることは避けられない」という論理的帰結を指摘した。だから $Spec_V$ 位置に発生した $Subj/t_{Subj}$ は、equidistance という抽象的空間の中では最終的ゴールである文主語位置 $Spec_{Agr_{RS}}$ と equidistant でない異分子ということになる。一方、樹形図上離れて見える Obj の方は $Spec_{Agr_{RS}}$ と equidistant である。

だから、途中に介在する異分子による移動の阻害を云々するよりも、※「最小領域内の移動が優先される結果、同域外の異分子は最小領域内に移動できない」と主張する方が良識的と言える。以上の論点に関して、図1を再々掲、図9を再掲して検討してみよう。

図1 (再々掲)

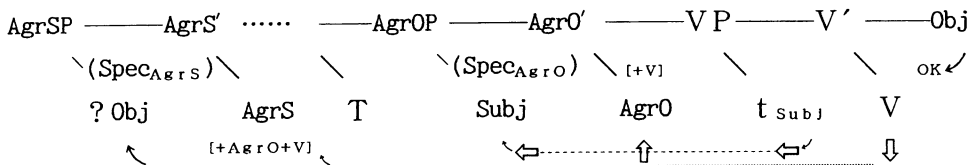
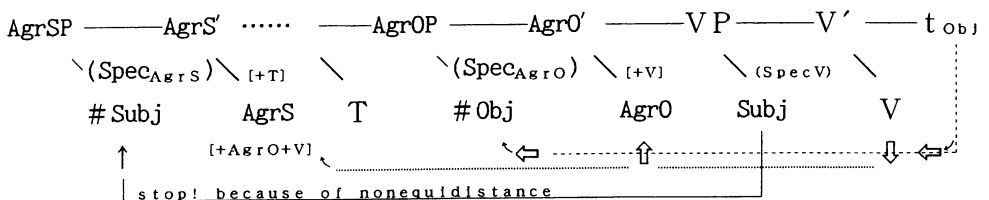


図9 (再掲) [ただし原初位置のSubjはSubjと書く]



置に留まることもできない。そこでSPEC2 はまずAEHの指定辞SPEC3の地位に上げられるが、それはやがてSPEC4（そこで主格認可）を経て結局SPEC5の地位、すなわち文主語の地位に到達する。簡単に言えばこれが難易文ということになるのである。

以上は、図4のSOOTh図式でもVの指定辞が文主語になることがある、という話の一例であった。しかし普通の事件記述の文ではのりに乗る素性は[軀謎]であり、そののりとV（事件・動態述語）との間に現れるSPEC1は恒常的属性の担体（持ち主）という意味機能を通常もつことができないから、それは事件の起こし手、すなわち能動者を表わす、というのが順当な解釈であろう。これが他動詞構文の主語候補であるのは当然であるが、生起した現場では格を貰うことができない。引率者のVはともかく、配率者ののりはあまりに抽象的なので、（主）格の認可という仕事の能力がないのである。そこで主語候補は一挙にSPEC4に転入し、そこでTとAGsによる「挟み統率」を受けて主格を認可され、最終的に語用論的地位であるSPEC5に到達する。受動者項のSPEC2が移動しなかったため、これが唯一の移動であり、もちろんSPEC2の位置を跨ぎはするが、交差通路も入れ子通路も発生しない。ミニ・プロの煩瑣で破綻した詭弁に比べて格段の簡潔さであろう。

そして、出来上がった統語構築物を逆（図では右）の端、つまりSPEC5から左へ向かって読み出せば、主語→時制子→動詞句の順序に読み出せるが、もしVPの中からVが抽出されて時制子の位置へ上昇し融合すると仮定する【実際、英語の動詞定形はそのような融合体だと考えられる】と、主語→定形動詞→目的語の順に読み出せることになる。この順は、節文構築の過程で主語候補→V→目的語（候補）の順に導入したのと同じ順になっている。つまり、海苔の佃煮のCMではないが、「左から読んでも△○□…、右から読んでも△○□…」のようなことを形式文法理論では「翻転可能性」と呼ぶことにしたい。或いは「回文性」'palindrom(icity)'と言ってもよい。このことは言語の本質上重要であるが、当面の課題である変形文法の批判に傾注するため、別の機会に譲る。因みに「翻転」というのは裏返す・裏返るという意味であり、左手用の手袋を裏返せば右手に嵌まるようになる、といったことを連想して頂ければご理解に便利であろう。

7. 彼（ら）はなぜ「VP内主語仮説」から構築を始めたのか

言語は聞き手に話し手と同じ認識構造を作らせ、擬似認知体験をさせることを本質とするから、節文構築と節文分析（理解）が相似的に進む「回文性」'palindrom(icity)'は、特にconfigurationに依存する度合の大きい英語のような言語では重要であるが、チョムスキー（派）はなぜ $[_{VP} \text{Subj} [V \text{ Obj}]]$ の末端構造から句構造構築を始めたのであろうか。出発点をこう設定すればpalindromicな「入れ子通路」移動はもはや不可能であり、「交差通路」を通して平行移動的（ということは隠れた2次元を含意するが）に表層のPF = $[\text{SUBJ}_{\text{NOMI}} \dots [V_{\text{INFL}} \dots \text{OBJ}_{\text{ACCU}} \dots]]$ を作るしかない。つまり上記の始発VPはclauseの雛形、或いは（1次元の）幻灯フィルムの画像のようなものであり、隠れた第2の次元

からの光の作用を受けてスクリーン上に原始の階層を維持した 'full-fledged clause' が形成される、というのがこの学派の根本をなす表象図式のように見える。もし原始の階層性というのが、現実には語られる節文のデータからまったく独立して、言語の本質から演繹されたものであれば、チョムスキーの知性は大したものであろうし、賞賛すべきであろうが、実はこの話は循環論法にすぎない。そもそも [_{VP}Subj [V Obj]]の末端構造は、実は [SUBJ_{主格つき}……[V_{活用つき}…… OBJ_{対格つき}…]]という節文の実現形をいわば「撮影」して作ったフィルム画像だった。だから「上映」に際して平行拡大性が成立するのは当然であり、交差通路もその帰結だから、彼の読者／信奉者は体よく彼に騙されていたことになる。件の始発末端構造はθ役割確認のため必要だ、と彼は言うが、次にそれを検証してみよう。

8. 循環論を糊塗するC&T理論の末端（他動詞）句構造

さすがに同著第3章の原始末端構造=VP内主語説では、現実の節文の撮影画像であることが（明敏な人には）見え見えなので、彼はそれが言語の奥深い本質から来るもの？であることを示そうとして[1995]の第4章 'Categories and Transformations' を発表した。その原始末端構造は項のθ役割の確認にこだわった図5♠である。

※図式(182) :←Chomsky[1995]

図5

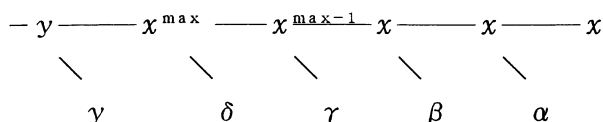


図5の原図は実は同著p. 352の図式(182)♠である。このようにSubj, Objと書いてしまうと読者の思考を束縛し、はたしてSubjが文主語に進出するのか、Objが目的語になるのか疑うことができなくなるので、図5のように下位から順にNP1, NP2と書き直すことにする。これらの図で、Vは1項動詞、恐らく受動的ないわゆる'unaccusative verb'であり、NP1はVの唯一項であるから受動的なθ役割を付与され、vはfactitiveな意味をもつ「軽動詞」であって、次のNP2は1つの補文と1つの項をもつ動詞vの指定辞であるが、vの意味からして能動的なθ役割を保証される、という。図5に示す他動詞句の末端構造を仮に「VP内主語仮説」と呼んでおこう。

この図5は語彙項目としての他動詞ができるまでの過程の話であり、このように項のθ役割が決まってから、Vがvに編入されV+vで他動詞Vbが形成されるという。そしてこのシステムの採用に伴ってAgr0とAgrSは廃止されている。移動は「素性をチェックせよ」によって、いわば検査官に相当する要素の位置へ被照合要素が誘致(attract)され、素性の需要と供給で、いわば-の電気と+の電気が中和して消えるようなメカニズムで行なわれる、とされている。また※図式(182)でも図5でも新【v^{max} など】・旧【VPなど】の表現が混在しているが、新しい表現は'bare phrase structure'の思想に基づく。

さて、上記の 'bare phrase structure' の思想を理解するために次の図を見よう。この思想の特徴は「投射の階層を認めないこと」である。

図6



すなわち、図6のようにたとえば x という（最初ゼロレベルから出発する）範疇が次々に α 、 β 、 γ という結合相手とmerge していった、次に δ とmerge したところで最大投射 x^{\max} に到達したとする。ここで図6に現れるいくつかの x は、従来なら右から順に x^0 、 x^1 、 x^2 、 x^3 …とでも書くところであるが、'bare phrase structure' だから階層の差は無視される。いまここで α [従来「補語」という特別の身分を付与されているもの] が β 、 γ 、 δ などとは特別に異なった構造構築上の機能を果たしているかどうか考察してみると、答は否定的である。 α は x と合併して x というラベルのシンタグマ（統語構築物）を作るが、 β もまた x と合併して x というシンタグマを形成し、その点で α の構築機能と何ら違いはない。 γ と δ についても同様。従ってこのシステムでは、 x を投射させるための補充要素はすべて平等であって、特に最初の補充要素だけを「補語」として特別待遇する必要はなく、いわばすべてを「指定辞」として扱うのが整合的だ、ということになる。

しかし、これらの補充要素 α 、 β 、 γ 、 δ のうちで仮に何か一つのものに特別な待遇を認めてよいとするならば、その対象は最初の補充要素 α ではなく、むしろ最後の、つまりそれを以て x の投射を締め括る補充要素 δ ではないか、と思われる。なぜなら、仮に x の領域の直上位に y というゼロレベルの範疇が掛かった [すなわち x^{\max} が y とmerge した] と考えると、それまで $x^{\max-1}$ と δ との loose な併置構造であったものが、 y によって確固化 (consolidate) されるのであるから、 x の補充要素のうちで最も直接的に、或いは強く y の影響を受けるのは δ である、と言える。これが「引率」の概念の根拠となる。

以上の予備的考察を経たあとで図5を見直すと、一応 v の「補語」がVPで、「指定辞」がNP2 となっているのであるが、それらは単に第1補充要素、第2補充要素ということであるから、順序は取り替えることができるし、VP内部の投射段階を無視すれば単にVと書き替えてもよいことになる。その線で図5を書き直すと図7♯となるが、これで終わらない。 v はVを編入して他動詞にならねばならないので、Vの唯一項NP1 も $v (+V)$ の直接の補充要素へ上昇しなければならない。すると結局図8♯ができる。

図7

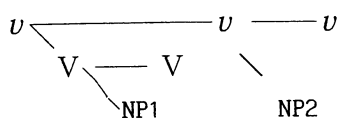
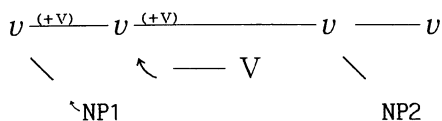


図8



こうして図8ができたところで、改めて項NP1 と項NP2 の θ 役割を回顧してみよう。項NP1 はもと 'unaccusative' のVの唯一項だったから受動者、NP2 は factitiveな v の唯一項だったから能動者である筈であり、チョムスキー図式(182)が Obj, Subjと書いて想定したような項の候補者としてnominateしたものである。ところがわが図8を少し古い思想で見直すと、何と！目的語候補がSubjに代わって指定辞で、主語候補が Objに代わって補語の地位を占めているではないか。bare phrase structure をつきつめるとこういう結果になり、ますますSOOTHに有利になってくるのである。そして大阪弁で「チョムはん、あんさんの図式(182) はあきまへんで。妄想でんがな。」とおちよくってみたくなるのである。私は大阪のnativeではないが、おちよくりには大阪弁が最適なので…。

そしてなぜ図式(182)・図5があきまへんかと言えは：Obj=NP1を新しくできた Vb 或いは[$v+V$]の項にしなければならないが、そのためにはObj を支配するV節点を消さねばならない。そして[$v+V$]内部ではVがお客・ v が主辞であるから、Obj が新たに[$v(+V)$]の「補語」になれば、形式上それはVの領域から v の領域への上昇移動ということになる。ところが「補語」の地位は上昇或いは外部からの補充によって満たすことはできない、とされているから、チョムスキーの理論体系はすでに破綻している。【同著p. 390 の註94で彼はつべこべ言い訳しており、オカ・トシフサという日本人(?)の私信に言及しているが、オカ氏もオカしい。'must be understood'と命令するだけでは、説得力は全くない。】対して図8では投射の主幹が v で一貫しており、NP1 は指定辞であるから、上昇してきたものであってもいいわけである。田原流解決のeleganceは明白であろう。

9. 'The Soothsayer Program' と 'trans-internal' の概念

評者が1994~95年にSOOTHという句構造のシステムを発表した時は 'Specifier - Original-Object Theory' 「目的語指定辞起源説」のつもりであり、他動詞句内部では目的語の方が指定辞で、残りの項である主語候補が補語に位置づけられていた。他動詞構文以外のいろんな文を処理するには主語候補をもっと早く、つまりもっと深く発生させる必要を感じていたので、1997年には、構築過程の最初に置かれる叙述力の乗物としてのゼロ述語 \emptyset に対して、その指定辞の地位に主語候補を位置づけることにした。このシステムが 'Subject-Occurs-Originally Theory' 「主語初頭生起説」SOOTH2である。これで目障りな補語項を廃止し、「項はすべて指定辞」とすることができた。そしてそれらの説の信奉者を 'Soothsayer' と呼ぶことにする。これには「真実を語る人」「予言者」という意味があり、Unsoothsayers であるChomskyansに対抗する心意気の発露である。

冒頭の図4でわかるようにSOOTH2では、他動詞主語候補SPEC1 はVPの領域外にある、という意味でexternalであるが、「地理的」にはVP内部、さらにV'内部にあり、V'に支配された \emptyset Pの指定辞に生起する。これをV'-trans-internal argument, 「動詞の超内項」と呼ぶことにしたい。「超」'trans-'というのは、間に最大投射のPを挟んで

いてその向こう側の内部ということに困んでいる。そして変形文法が external θ -role ということを行い、それが [v -VP] configuration つまり図式(182) によって v +V 複合体(Vb)の指定辞に与えられる、とC&T理論は主張するが、それはあきまへん。

たとえば第4章(C&T) p.316 で彼は

"In these terms, failure of a transitive verb to assign an external θ -role could be interpreted as simply meaningless. The external role is a property of the v -VP configuration, and a specifier bearing this role is therefore a necessary part of the configuration; a transitive verb assigns an external θ -role by definition." と言っているが、まったく説得力がない。なぜならexternal θ -role に似た能動的な θ 役割は swim や dance のような'unergative'自動詞もその唯一項に与えるからである。だから語彙形成論の立場から言えば、すべての動詞は v から構築を始め、能動的な項はその「外項」でなく「超内項」に位置づけ、Vを動詞でなく過去分詞のようなものと性格規定した上で、それを編入した[v +V]を他動詞と考え、その唯一項つまり指定辞にinternal θ -roleを保証する、という理解のしかたが、今まで積み重ねた論理・議論からして(変形文法の枠内では)正しい、という結論に到る。

「ではexternal θ -roleというものは認めないのか」とか「主語の能動的な θ -roleはどうやって保証するのだ」という反論が起きてくることが予想されるが、SOOTH2では θ P内(つまりVから見てtrans-internal position)のSPEC1に θ 役割を保証する手段を特にもっていない。Vの被配率子(=指定辞)であるSPEC2が格チェッカーAGoとの挟み統率を受けて、対格とともに受動的な θ 役割を保証されるので、Vの被引率子であるSPEC1が、残った方の役割、つまり能動者役割を消極的に引き受けるだけである。能動/受動の θ 役割保証は一方だけで事足りるのである。

結論として、以上のようなSOOTH2の能率性とeleganceに比べて、ミニ・プロの非能率と膨大な煩雑さ、そして内包する数々の矛盾は明らかであり、最小限の価値さえないという意味で'minimalistic'であることが判明した。この大著の出版を契機として「天才チョムスキー」が見限られ、凋落が始まったのも宜なるかな、である。

参考文献

- ☆田原 薫(1996) 『ニダバ』25号 「SOOTHと「挟み統率」から開ける展望」
- ☆田原 薫(1997) 『ニダバ』26号 「ゼロ述語から出発する句構造文法」
- ☆田原 薫(1998) 『ニダバ』27号 「主語初頭生起説から見た英語の完了構文」
- ☆田原 薫(1999) 『ニダバ』28号 「英語の中間構文を支える句構造」
- ☆田原 薫(2003) 『ニダバ』32号 「新句構造文法と補文Wh痕跡問題など」
- ☆田原 薫(2004) 『ニダバ』33号 「英語学のための句構造説最終決着版」
- ☆田原 薫(2005) 『ニダバ』34号 「「カリスマつまみ食い」論文作法の戒め」
- ☆田原 薫(2007) 『ニダバ』36号 「句構造論の存続適性を分ける分水嶺」